

7月豪雨顛末記

7月12日未明の事でした。稲妻が闇を切り裂き、雷鳴がとどろくと、凄まじい勢いで雨が屋根をたたき始めました。先週から降り始めた雨は一段落していて、梅雨明けは近いと思っていただけに、慌てて出勤しました。既に公民館前のバイパスは河のようで、車が水しぶきを上げて走り抜けていきます。

これはやばい！避難が必要な住民が出るかもしれない。いつもより早めに出動してきた職員と、避難者受け入れのシミュレーションを行い、とりあえず落ち着いてもらう部屋を準備しました。雨の勢いが弱まった10時過ぎから、住民の方が公民館に避難してきました。その方々の話を伺うと、「家の前の溝が溢れて玄関先まできた」「田んぼの水が溢れて道路が冠水している」「裏山が崩れそうで怖い」等々、

切迫した様子が伺えます。

朝酌川自体は河川改修で川幅も広がり、何の心配もないのですが、支流の小河川や急勾配の水路などは、豪雨に襲われると簡単に溢れ出してしまいます。しかも、川津は土砂災害危険区域が多く、たつぷり水を含んだ大地は崩壊の危険性が高まります。

雨雲レーダーの線状降水帯が西に去り、公民館に避難された方々も全員帰宅された夕刻、ふと崖下に住む老婦人のことを思い出しました。どうしているのだろう。土砂降りの最中にはどんなに心細かっただろう。一言声をかけてあげればよかったな。

独り暮らしの身にこんな時の一本の電話がどんなに心強いか容易に想像できます。夕闇の中で後悔の念がさざ波のように打寄せてきました。